



遠江・山と里の民俗

会報 第020号

高円宮妃との記念撮影

地域伝統芸能授賞式

高円宮殿下記念地域伝統「芸能賞」「支援賞」

令和4年10月8日、山口市で第30回地域伝統芸能全国大会「地域伝統芸能による豊かなまちづくり大会やまぐち」が開催された。その会場で、本市の西浦田楽保存会と横尾歌舞伎保存会床山衣装部が高円宮妃殿下から表彰された。

同大会は、一般財団法人地域伝統活用センターが主催し、毎年全国都道府県を巡って開催されてきた。令和4年度は山口県を会場とし、3年ぶりの開催となった。過去2回にわたり、新型コロナウイルス蔓延を考慮して中止され、令和2年度に予定された静岡大会では西浦田楽保存会が「高円宮殿下記念地域伝統芸能賞（同年度の大賞にあたる）」を受賞し、令和3年度の鹿児島大会では横尾歌舞伎床山衣装部が「支援賞」を受賞していたが、表彰式も順延となっていた。令和4年度大会では、中止された過去二年間の授賞式も合わせて開催されること

になり、両団体の代表者各2人が山口市まで出かけることになった。

大会の開催は、8日（土）と9日（日）の両日で、新山口駅前（旧小郡）のKDDI維新ホールを主会場とし、山口中央公園（山口市街地）他を副会場として令和4年度受賞団体と山口県内の団体による伝統芸能が演じられた。令和2年度と3年度受賞団体は残念ながら公演の機会がなかった。

当該年度の最高賞を受賞した西浦田楽保存会、また裏方に注目して支援賞を受賞した横尾歌舞伎床山衣装部とも、壇上に進んで活用センター会長から表彰状を受け、高円宮妃殿下からメダルを拝受した。

この大会は、国土交通省（観光庁）と経済産業省が支援し、芸能を通じた地域振興を期待している。長く継続している文化財保護団体を表彰するというだけでなく、積極的に外部に発信している団体や、いったん休止したが最近復活した団体、新たに興した祭り「〇〇よさこい」なども表彰の対象としている。



記念メダル

両日の公演は、当日のNHK総合二
コースで取り上げられただけでなく、
11月2日には、BSプレミアムで全国
放送された。



西浦田楽 授賞式



横尾歌舞伎 授賞式



横尾歌舞伎の出席者



西浦田楽の出席者

地域と関り、継続に向けた
手立てを工夫している団体
を支援するという趣旨がう
かがえた。
主催県や主催市も積極的
にかかわり、無形民俗文化
財（ここでは地域伝統芸能）
を紹介する全国大会として
は極めて大規模な催事であ
ったが、今大会をもって終
了するという発表があつ
た。西浦、横尾とも最後の
大会でようやく表彰式に出
席できたことになる。

浜松市内の面 (三)

◆神妻神社

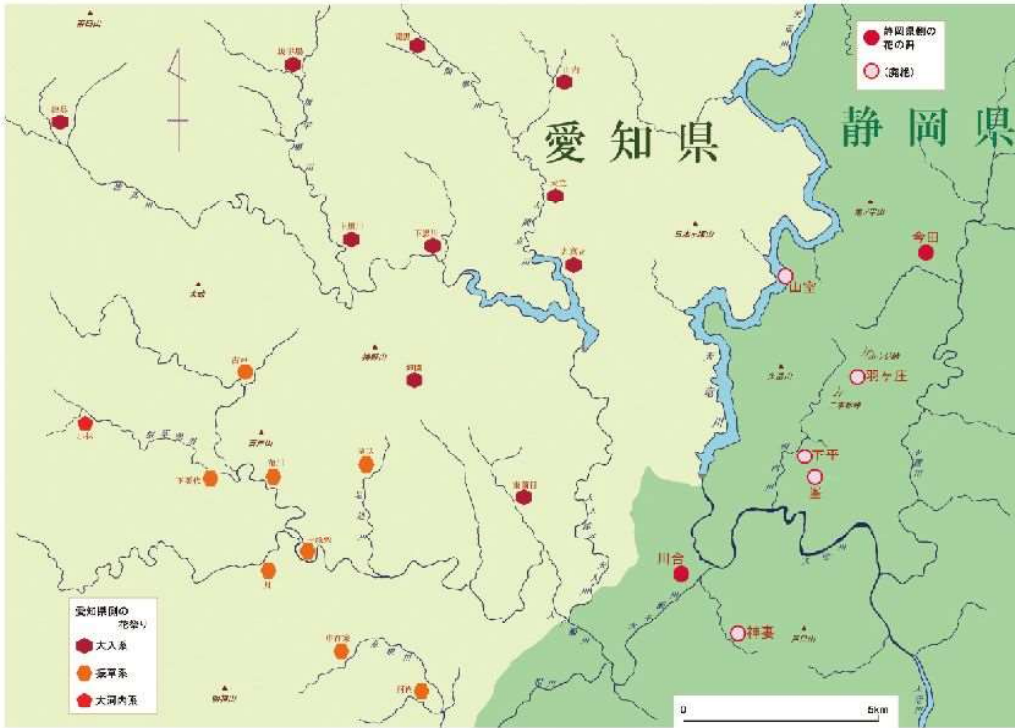
(天竜区佐久間町)

浜松市無形民俗文化財保護
団体連絡会では、市内各地に
伝わる面を少しずつ調査し
て、写真を撮影させていただ
くとともに、いわれなどを紹
介していく事業を継続してい
る。ただし、令和三年度は新
型コロナウイルスの流行で、
しばらく調査を中断していた。
令和四年度になって、少人数
での調査を断続的に再開す
ることにした。この調査には各
団体や関係者のご協力をいた
だいている。
先に本紙16号と17号で、引
佐町や三ヶ日町・佐久間町に
保管されている古面を紹介し
てきたが、まだまだ端緒にす
ぎない。

昨年五月には、静岡県指定
無形民俗文化財である川合花
の舞を継続している八坂神社
と、大千瀬川（天竜川の支流
のひとつ）の谷を挟んで対岸
にあたる神妻神社を取材した。
いずれもJR飯田線下川合駅
が最寄り駅となる。

下川合駅南東の小支谷の奥
部、峠に近い高地に広大な境
内がある。代々神職を務めた
月花氏のご案内で、整備され
た林道を数十分、車で登った。
社殿や神門のほか石垣を積ん
だ平場が多数設けられてお
り、往時には末社を含め多く
の人間が常住していたものと
思われた。かつて花の舞が行
われていたとも、川合花の舞
が奉納されたとも言われる
が、すでに知る人はいない。
「神鬼」をはじめ五面が町内
に大切に保管されていた。
これらのうち「春日面」と朱
書された翁の面には「享保十
三年（一七二八）」と、また
「水王」には「享保十八年」
という年号のほか、「三州住





白川主水」また「月花若狭守代」と墨書があり、これまでに当会が調査した花の舞の面ではもっとも古いものであった。大形の「榊鬼」には銘は認められなかった。川合花の舞はこの面をモデルとして鬼面を製作したという。

奥三河各地の花祭りでは神寄せて処々の神々を唱える中に「遠州の神妻（あるいは御神妻）」と、この神社名も登場し、広い範囲に信仰された神社だったと思われる。現地で石垣や巨木を見ると、首肯される。



◆八坂神社

(天竜区佐久間町川合)

当連絡会会員で、県指定無形民俗文化財である「川合花の舞」が継続されている。祭事の前に神前に面を並べるところを再現していただいた。九面のうち実際に舞で、順次使用する面は八面で、残りの天狗一面（「猿田彦」と記す）は「社殿内に飾ってあった」という。「オカメ」と対になる「シオフキ」に「信陽（長野県）住梅嘯作」とある



ほか「翁」に「明治十四年（一八八二）」という製作年が見られた。現有の面の製作者や製作地はさまざまのようである。また、神妻の面を着けて舞った人物から面が離れなくなったことがあったともいう。神妻のものも面長三十センチメートルを超える大形の面だが、川合では四十七センチ弱とさらに大きく設えている。

◆一宮神社・二宮神社

(佐久間町奥領家)

八月末には今田を訪問した。当連絡会会員である「今田花の舞」が継続されている。中央構造線沿い、ホウジ峠の北側の谷あいにある今田集落には、一宮と二宮という二つの神社があり、一年交替で花の舞が奉納されている。

使用される面のうち「鬼面」と「柵宜面」は祭りの年のたびに一宮神社と二宮神社を行



き来するが「火王」と「水王」は、二宮神社から持ち出すことが禁忌となっているため、一宮神社で花の舞が開催される年にはこの二つの面を使用する舞自体が行われない。

四面のうちでは「鬼面」が面長約四十七センチで突出して大きい。鬼ではあるが、角が見られない。「柵宜面」は黒色で「火王」と「水王」はいずれも赤色を主色とし、眼を黒く塗る。鉞は一本、鈴は四点が残されている。鈴は古い形態に見える。また「舞の始」を「寛政十一年（一七九九）霜月」とする記述がある。

「懐山おくない」保存会 元会長 大石伝次さんを偲ぶ

懐山おくないに関わってきた大石伝次さんが、昨年亡くなられました。生前に次の世代に伝える寄稿文を残していただいていたので紹介します。

浜松市天竜区の「懐山おくない」が正月三日午後から始まる。長年(五十年以上)関わってきたが常に、おくないの古い形を、正しく伝えて行くことに専念して、詞章・舞の内容についてはあまり考えることはなかった。

改めて詞章を深く読み、舞の振り、面採物等をよく観察し関係する文献等を読み、研究者、大学の先生の話や聞き取りなどすると、おくないの発生が古いだけに色々の情報、隠されていることに気付かされる。それらは歴史的文化的であり特に生業関係の演目については、古い時代の農業技術農具・諸道具を知ることができる。

一般におくないには能楽の原型が見られると、云われているが、中央との関係はよくわかっていない。



懐山おくないを見守る生前の姿

■懐山おくないの芸態

(一) 前段の祭事

正月三日の午前中に自治会長が六所神社の裏手にある不動様の滝の水を汲みに行く。この水はおくないに使用する面、採物、衣装等を清めるのに使用する。当日は午後一時

おくない参加者が十人程浄衣陣笠をつけて泰蔵院の阿弥陀様の前の座敷で両側に分かれて着座し上座よりN型に酒をつぎ、これをもどす。これを三度繰り返す。三々九度の盃という。次いで御供(飯)を箸で勧め、各人は掌に受けて食べる。盃事がすむと、口に香柴の葉を一枚くわえ、無言で伽藍様へ行き、禰宜役が祠を開帳、餅を供えて一拝、続いて三々九度の盃をなし、最初に禰宜役が順の舞を舞う。

この時次の唄を唄う。

「とんとんたれや たらろちりや らんかんどう。ちりやらんかんどう」三回

「四季は四節のそのなれと、いつとも四季をぞ申す。いやう四季なれば、春の四季こそことたまはん」これがすむと、泰蔵院に戻り舞を始める。



(二) 舞の種類

- 神の舞 ● 三つ舞 ● 槍の舞 ● 槍もどき ● 劔の舞 ● 劔もどき ● 両劔の舞 ● 両劔もどき ● 翁 ● 松影 ● 宵の獅子 ● 鬼の舞 ● 仏の舞 ● 年男 ● 火王様 ● 鞠のかじりの次第 ● 四節四季の次第 ● 松竹の次第 ● 田打 ● みの口 ● 田打洗い ● 草取 ● 草敷 ● 種蒔 ● 鳥追い ● 米搗ひる洗う ● 田遊 ● 山家田楽 ● 肥ならし ● 稲刈 ● 女郎の舞 ● 稲むら ● 駒の舞 ● 猿追い ● 桑取 ● 綿買 ● いとくりの次第 ● 潮買 ● 悪魔払い ● 夜明けの獅子 ● 舞納めと40の演目がある。

この演目は米作に関することが多く、懐山の人達が如何に豊作を願っていることがわかる。次に養蚕に関するもの、馬に関するものがある。右の40の演目の内、現在行われていない物が11演目あり、となえ言のあるものは敬遠されていったようである。

その中で他には行っていない焼き畑農業に関する山家田楽遊びがある。

(三) 山家田遊び

焼き畑農業

これは焼き畑。畑作の芸態である。二人の陣笠をつけたものが九つの唄を歌う。次に二人の者による粟穂の取り合いと、粟穂を比べ合う所作がある。山家田遊びの芸態である。

梅の花が咲いて桜、大豆、小豆の花が咲き栗団子を食べること、粟穂の演技すべて、豊作の予祝である。

このように山深い懐山ではおくないの中に畑作業も含まれていた。

毎年正月三日泰蔵院に於いて、おくないを自治会を中心に行い、家内安全・五穀豊穣を阿弥陀様に祈願することは、現代的に解釈すれば、むら共同体存続を確認し、さらに発展させたいと云う願いである。過疎化の今日、懐山集落全員で力を合わせ周辺の人たちの力を借りて、継承してゆくことを願っている。

大石伝次